

# 淡海錄

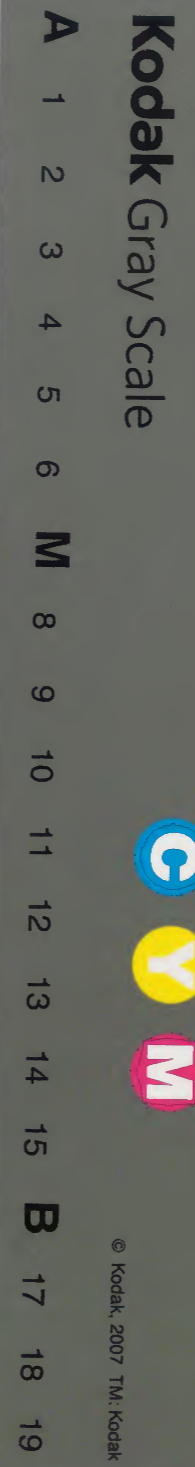
地  
農商務省  
圖書  
第 號  
共 冊

大政官文庫  
和書門  
一  
二  
三  
九冊架兩部

內閣文庫	
番號	和 11131
冊數	9 ( 1 )
函號	174 170

內閣文庫	和書門
一 二 三 九冊架兩部	和書門

風土





清海



高木

一

勢南高木舜民藏書



淡海記十二卷凡例二十五卷目錄

明治十四年購求

國史館

一第 一海陸記 子上中下

一第 二山川水石記 丑上下

一第 三舊都并武將所古今御城記 寅上中下

一第 四古戰場記 卯

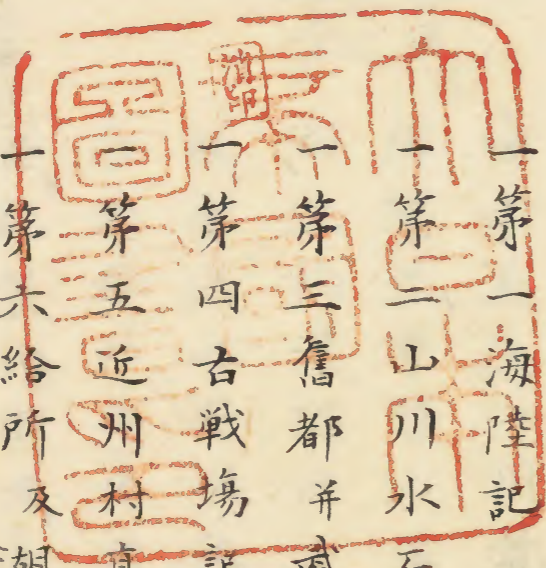
一第 五近州村高帖 辰

一第 六給所及湖船帖 巳上下

一第 七海陸行程同土產 午上下

一第 八日吉同佛閣同山記 未上中下

一第 九竹生石山記 申上下



- 一第十長等同興廢記 酉上下
- 一第十一神社同佛閣附 年中行笈記 戌上下
- 一第十二遺事雜錄 亥上下

淡海地志序

左魚吳都賦  
未和英雄之  
所躔也注歷  
行也

中山道近江州者六十餘州之上腴而萬古風月之所躔也粵替人王第七代孝靈天皇四年江州地折湖水始湛駿府士峯忽出焉夫淡海之號出于大成經樂浪之名顯萬葉歌古傳言白鬚明神曾見湖水七度變枯為桑田然則此湖濫觴亦尚哉當靈皇之世既裂而瀦者蓋涸濫變易之後也抑有湖中一夜涌出之島曰千藏生此降八州諸祗諸鬼而後釋行基對神女仙都良得神對豈不稱曰靈湖也歟江湖狀甚類於琵琶故得其名鍾容八百餘川洋洋而浮

既也既字誤博雅  
既裂也

于宇治、達南溟而會焉。既究厥邊境，則東接濃勢、西  
交山丹、北隣若越、南界伊賀、環之以七箇國而畧焉。  
厥土五色、厥田惟上、校厥收穫、歲修貢八十三萬餘  
斛而稼穡豐羨之國也。昔者分二十有四、今區隔十  
有二郡、計其行程、橫得十有六里餘、豎得三十有三  
里若干。本國里數有三等、三十六里為一町、三十六  
里若干、号為一里者、但以六号而為一里者、又以五  
十号而為一里者、今從、熟以湖者、先王之奮都、古僊  
三十六号為一里者、矣、之靈境等、覺補處之應跡而明神傑僧之遺蹤也。所  
謂帝者、高穴穗宮、大津宮、神者、山王新羅白鬚黑主、  
釋者、最澄圓仁圓珍良源信僊者、長等教待松堂童

皇不雅狀謹  
服也

子逢坂蟬九琴尾谷教忍、將者滿仲惟茂、武者秀鄉、  
高綱、各在於湖、盛德無極、其他人雄地靈、乙々匪惶  
收舉可謂偉也、前殘乎士峯之一簣、後遷于漢土之  
四明、左浮御堂於西岸、右掛長橋於東流、下占河伯  
之幽宮、上築膳所之高城、北餘吾內海、東磯山入江、  
朝嵐飛白鷗、暮月躍金鱗、俯觀陸海、仰望山川、鱗如  
疊、泉如涌、浦曰則七浦、三津、濱八十湊、水曰則御井  
清水、走井山井山曰則四明、三上比良、橫川、伊福貴  
已高見、織山、床山、石曰則影向石、登天石、白石、金石  
鎧石、千石岩、坂曰則王坂、女坂、雞坂、蟹坂、池曰則鶴

澳

池龍池、瀧曰則布引瀧、鎌倉瀧、川曰則犬上川、鳥居川、猫田川、馬渡川、舟木川、箕浦川、島曰則竹生嶋、多景嶋、與塚曰則木曾塚、今井塚、慶祚塚、安然塚、牛塚、龜塚、經塚、車塚、古城曰則觀音城、小谷城、佐和安土、坂本、勢曰大津、閭閻、撲地車馬、充街湖水、順風舸艦、迷津、鐘嶋、鼎食之家、百隧、町架質劑、平而交易、常鬻鱗粟為產、尔乃土地富饒、而宦途之驛郵也、滋賀之範、石山之螢、以報春夏、比良雪、關山之雁、以告秋冬、鱗、似毛羽、異艸、恠樹之壯麗、不可以勝計、矧攢峰列、巖、雨奇晴好、朝吟暮詠、曷有窮哉、向曰萬古風月之

同札地官市以質劑結信而訟注質劑謂兩書一札而別之也疏質劑謂券書恐民失信自所違負故為書結之使有信也大市質亦市以劑

所躔、稍如此、雖然、予菲才固陋、寡聞、纔百分未得記其一、更伏請來哲方正、因為是序、

元錄元年孟春日

淡海散人原田藏六州稿

淡海錄自叙賦駢麗厥詞曰  
淡海名區嘗始礮取盧島  
近州勝境已成波止土濃  
境界分十二郡山跡中國  
修貢充百萬斛浦安上腴  
四至行程一千七百里  
一州閭闔一千三百村  
昔偉帝都舊是儋府  
地高北嶽水入南溟  
天低東陸山倚西湖  
多少梵刹豈知其數哉  
八十輻湊不可勝計也

青龍擎日晨騰鏡嶺 四時雨若  
白虎負月晚浮琵琶湖 分野星陳  
天神和光 玄聖垂跡  
江左四面玲瓏如玉而暉 八景詩歌舉乙隅  
海門滿眼丹青猶華而皖 乙湖變態有七度  
水哉水哉 三津濱飛五色雲浪  
山云山云 四明洞植乙乘妙蓮  
竹生之竹猗々 可謂隔世諦  
石山之石巖々 皆出於天真  
鳴嶼紫迴極蓬與瀛 寶器珍玩慕如布

岡巒體勢在靈亦神 羽毛鱗介櫛如此  
八百八河 九十九浦  
閭巷撲地 曉鐘暮鼓山鳴響海  
舸艦問津 朝嵐晚風水涌貯連  
峯興祥雲 丹總壯觀无盡  
澗簇瑞霧 名浦克實有餘  
山水不與乾坤老 前世如展  
江風唯將日月新 後代无期  
聊述寸心 仰祝  
萬歲

元錄三龍集康午陽復月



琴湖處士原田某頓首百拜

先生姓大倉氏原田字藏六琴湖輻湊津之人也藏之曾祖者栖老于大津嘗為德川參河守秀康卿之御被宦然及子孫門衰祚薄流落於湖藏也自幼好書不爭利廢家業半隱市性癖嗜詩遊于藝恆教男兒授學日夜舌耕而食可謂遊手方外之民也爰自考訂淡海地理舊墟亥實蓋有年矣頃曰湖圖一葉地志二十有五卷漸以盡成書亦就名曰淡海錄今讀此集湖山邑里川谷宮寺泉石河橋艸木墳墓

人物海陸行程題詠之屬無不悉載也丹青亦華而如班々一過于湖者對此書畫則恰如旧識也唯恨未全備焉前是湖未曾有誌之者猶無止則竟成其功而已嗚呼人笑其文不續予憐其志不淺故應其求而不得以辭漫書贅于卷尾云爾

于時元祿壬申初冬

釣雪子艸書

淡海府志

湖中上

一人皇弟七代孝靈天皇五年淡海國地并湖法

同時に淡海の國富志始る也

出合運圖及神社考

一人皇弟七代孝靈天皇十二年淡海湖水暴然一夜

地震出二嶋火消地震又止神女坐嶋改今の竹

生嶋是る也 妻載竹生記

一湖北は美系足利海

河淡波云

南はくハ志賀大田ナ、ワタお毛の波ハ、ハいふおからい

ま  
やうはあまのついでに西の海にありし頃の沖舟月夜にあり

万  
内、波の志賀大田の志賀の者の人ふよもあらあま

新千  
とるはあまの志賀にこころを致しお毛の志賀の志賀

の百人  
船の中はあまの志賀の志賀の志賀の志賀の志賀

一 浪海と 樂サ、ナミの浪ハ、ハいふと 長等山ナカラヤマ教待仙士大津の

空の山阿天宮にさ奉りしとるを志賀の志賀の志賀

けぬ水波浪大田の志賀の志賀の志賀の志賀の志賀

名実の國芸云 出凡土記 鎌足公封江列云浪海也

樂々サ、ナミ波字多ナミく出万系 樂々波那 文選 素波サ、ナミ

漣漪サ、ナミ詩經 泊柏サ、ナミ 文選 樂々波とハ 津代の名也神代奇なりと  
ト都美邦記ニ出ス

万  
樂浪之思賀乃幸海サ、ナミ堆幸有大客人之船麻知兼津

万  
九教難弥乃志賀之大和志与招六友昔人ニ亦母相目ハ毛

新百首  
波の志賀の志賀の志賀の志賀の志賀の志賀

一 湖海 丹穂 嶋ニホ 湖光 白氏文集

中の海や志事いふ事ある程の月を波間とてしるは東海  
定家

東神候やに何の海に候しあまもひをさるあまもひは  
上東門院

一近江 淡海 都江を記はむを記と云 都江を記と云

を記と云 聖記 あふふあふうこの異言と云

あふふの海多波の多ふあふふあふふのに何人候し候

一昔白鬚の神曾見 淡海 変端而化 素原 七四 出本朝 樂府

出台家説 憶に足麻姑仙人之見 東海之變為素原 出列仙 傳

蓋取之乎 高海動に素原村と云ふなり 高経

皇代御代に云ふ素原の淡田と云ふは海と云ふ事

一湖水 名 琵琶湖者竹生嶋の天女素原を好むゆ

ゆ海と 琵琶湖と名はく同なる神を好む天女と

名津と 出竹生嶋縁記 或云湖水の形似琵琶湖の面

故亦得其名 出州山集 魚に琵琶湖と云ふ魚何れ

乎 鏡其形琵琶湖に似るをゆへ名之 文選

湖水浅深

里田与木溪之間水底 六尋

比良之伸 六十尋

丹木与彦根間 七十尋

領家之市ヶ傍表

百二十尋

竹生湾

西百十尋 东七十尋  
南八十尋 北八十尋

武鴻

四面甚深四十尋

右深所如是其外生湾必涉不足悉激

湖水魚

夫魚者生于水水下流故魚動而下淮南子

魚始雷向下蟄頭皆向上物類相感志故雷鳴多矣

則攝鮮魚水有故其鱗波紋同隨筆

魚晝夜遊五方者也朝者東方日中南方

日西者西方黃昏者北方夜中者居中朝星斗

居家必用魚勞則尾赤持物志遊川流魚遊逆水

而上者也其中春夏逆流秋冬順流者也

又曰勢田貝白月取汝多黑月取汝少又云小月

魚腦減大月魚腦盈卜云

湖水魚之名

水鮭鱒鱒鱒藏似鯉雜魚雜鱒鱒

一舟子云春夏伊勢南風吹依舟東湖渡冬乾風吹故

西浦ヲ乘瓜サリ又云曉ヨリ日ノ生儿追勢田尻

定吹通是勢田祇神每曉竹生鷗へ列に故如是

ト云傳 又云湖水モシ水九合九則損毛二十有七

万石云 又云湖水江モ塩海如水差引女アリト云

北凡モ水北工流変アリ可試半

一扶桑名勝詩集引江陽日記百五十三曰明應九年

八月十三日近清政家公尚通父子依佐々木高頼

曆當作歷朝臣招請翹江別掩留曆キミ日所々有高覽此時

政家公有八京之咏云

江源武鑑云 永祿五年八月十五日屋形御馳走テ

近清殿三条殿石山到御遊詠有并奉

永祿中子の秋八月十子の夜予母をねりひ物

江西南山の月ゆみむとと云案の前は重相成

は程より都を忠ひ物と云はしと事やぬるよ

高國のゆき源義孝折しと目公と月とるそ

はまふありくあをさふあつちん身とさ

あ井ひなひもあさるひの月とさあさると上

くさつとあつちのさふそのひまよとさあつち

和奇一とさつちのさふそのひまよとさあつち

あはれなるこころをいかにかきとめて  
あはれなるこころをいかにかきとめて  
あはれなるこころをいかにかきとめて  
あはれなるこころをいかにかきとめて  
あはれなるこころをいかにかきとめて  
あはれなるこころをいかにかきとめて  
あはれなるこころをいかにかきとめて  
あはれなるこころをいかにかきとめて  
あはれなるこころをいかにかきとめて  
あはれなるこころをいかにかきとめて

あはれなるこころをいかにかきとめて  
あはれなるこころをいかにかきとめて  
あはれなるこころをいかにかきとめて  
あはれなるこころをいかにかきとめて  
あはれなるこころをいかにかきとめて  
あはれなるこころをいかにかきとめて  
あはれなるこころをいかにかきとめて  
あはれなるこころをいかにかきとめて  
あはれなるこころをいかにかきとめて  
あはれなるこころをいかにかきとめて

岩田房房

峯あはれ

舟橋瑞悦

高帆

北原暮雪

雪

石山秋月

石山や流れ海

栗津晴嵐

雲

唐詩夜雨

夜の雨

三井晚鐘

杉の影の

勢田夕照

香のよき

近清閑白身ははむねのま

わたりてきく筆は裁せよあつたはらむ人のこら  
らめ

私云

北近州八景之詩牙班々多ト云臣少安ニ畧ス

八景哥中斤山壽西ト云詠作り所謂

三井晚鐘 字ありまゝいへ

唐濟夜雨

鐘の音のこゝろを

豊田落石

雲井をきき音のなる

比叡音音

あやほりて余音の山に

夕橋帰帆

名にたすおのこゝろ

勢田夕照

夕日あやりの影を

石山秋月

らん草まきけのこゝろ

栗津晴風

常吹栗はれりまの

斤山壽仙を云の老人のまゝのまに命長めで



地仙を交へてもいふ所一老あるも道の志を成  
し孫傳に托りし記一ゆるかきう家名よのや  
いふ酒をさるるや當り大國秀吉公は河朝鮮涉  
出陣の御唐ののび中の樽飲すと云はれは  
唐物店に出る志と云ふ持扇は下世に為家孫  
といふると天正の前役の人を利

淡海録一之中

子之卷三册  
新具才二也

湖邊中

一 大澤 赤出は淡海志よりいふは但大津浦の也惣名は  
一 説に 相模山を神と云ふ水のさゆる所赤出の所と  
おぼせと申すといはれはあまの海志に申す如く淡海志に  
赤出物産に云ふ赤出を郡と申す今井の地を赤出と  
いふは大澤赤出の淡海志よりいふは赤出と書す昔丹東  
赤出物産の赤出といふ赤出と申す赤出の赤出と申す赤出の  
淡海志に云はれ同物赤出の淡海志と云ふ方角集に出

新に於て

駒<sup>こま</sup>の浦の浦と云ふは期日<sup>きじつ</sup>は<sup>後</sup>に<sup>相</sup>記<sup>さうき</sup>す

美丹<sup>みたん</sup>の浦は<sup>後</sup>に<sup>相</sup>記<sup>さうき</sup>す

一 大津の浦は七浦と云ふは<sup>後</sup>に<sup>相</sup>記<sup>さうき</sup>す

其<sup>こゝ</sup>の浦は<sup>後</sup>に<sup>相</sup>記<sup>さうき</sup>す

申<sup>まう</sup>す<sup>こと</sup>の浦は<sup>後</sup>に<sup>相</sup>記<sup>さうき</sup>す

湊<sup>みなと</sup>と云ふは<sup>後</sup>に<sup>相</sup>記<sup>さうき</sup>す

福<sup>ふく</sup>津<sup>つ</sup>と云ふ

磯<sup>いそ</sup>と云ふは<sup>後</sup>に<sup>相</sup>記<sup>さうき</sup>す

梅<sup>うめ</sup>磯<sup>いそ</sup>と云ふは<sup>後</sup>に<sup>相</sup>記<sup>さうき</sup>す

磯<sup>いそ</sup>八坂と云ふは<sup>後</sup>に<sup>相</sup>記<sup>さうき</sup>す

一 大津の浦と云ふは<sup>後</sup>に<sup>相</sup>記<sup>さうき</sup>す

之<sup>こゝ</sup>の浦は<sup>後</sup>に<sup>相</sup>記<sup>さうき</sup>す

大津の浦は<sup>後</sup>に<sup>相</sup>記<sup>さうき</sup>す

昔<sup>むかし</sup>の浦は<sup>後</sup>に<sup>相</sup>記<sup>さうき</sup>す

一 五色の浪と云ふは<sup>後</sup>に<sup>相</sup>記<sup>さうき</sup>す

緒<sup>おと</sup>谷<sup>や</sup>に移<sup>うつ</sup>り<sup>後</sup>に<sup>相</sup>記<sup>さうき</sup>す

又<sup>また</sup>五色の浪と云ふは<sup>後</sup>に<sup>相</sup>記<sup>さうき</sup>す

志<sup>し</sup>賀<sup>が</sup>の浦は<sup>後</sup>に<sup>相</sup>記<sup>さうき</sup>す

又色や波間此月城之井寺此鐘のひびきたあつる游海  
大津より車若くやあつる天智て自ら大津に都を  
守はし家殿を立給ふ時飛騨より沙村来大津のる  
にす飛くしくまふじく風土記に出

新六 關越と書まは海より大津馬の木のひびきたあつる  
山筋のお坂土ゆる小車に心厚きを多寂蓮ありに路の静

秋の日に長草此山のち系大津の里北かきあり

度訓に云大津坂本の了借と書り

大津馬役百五疋一丹役百被歩高千八十式人

け雨に大津力詩奇なり畧之

月所に八京あり畧之題の之成る記

關寺晚鐘 相坂暮雪 近松夜雨 尾花夕照

小関晴嵐 南湖秋月 赤出落鷹 松本帰帆

一大津 松本 馬場 此城三ヶ浦と云

一三津の濱ハ新友多抄に之志大津大津一而津是を云

三つとも坂本大津今津志津より甲子星を三津大津と云  
昔遠坂の浦三津所には見ふを流所傳山王太子権現歌  
流の地ありと云 又云傳はる大津の傳はる三津大津是の久

師

鳥三澤の流 元亨釈書出 故に坂の生活寺と

いふあるは 師 傳友大師の生居し流ふあり 又云三澤

の流る三澤の流るる事 何國ありとも 皇族の流哉

三澤の流といふるは 難波を三澤といふるは 皇族ありし

故にふといふ事ありとも 皇族ありし 浦里に流るる人じ

大澤 中務宗子祝五 三澤の流をたす事ありとも 皇族ありし

たす事ありとも 皇族ありし 皇族ありし 皇族ありし

右出神道肝要集

諸人の好む所と三澤の流内には流もさるるの事なり

七十に三澤の流松老ぬきと千代浦に流るるけり

流する三澤の流道の浦内なるもいふ事あり

井姓抄にけり 浦内なる云は 皇族ありし

一 膳所 大図記出 是世 大志記出 陪膳 類字出 膳

いふるは 膳所の流なる事あり

一 粟津 つちヨカスエ 昔恒世 商奉 粟津料 得其号 見エナリ

私云は 恒世といふは 依りて 源氏恒世の事あり

其は 商奉の流代天子へ 爲軍へ 粟津料を

得し 其人の事あり 膳所の事あり

と道に極まはつゝ宿瑞友と兼改の苑丈下甲今籠  
柎のきまよ人のゆる徳の一詩地記也

膳所城 古云栗津は是

春齋

栗津ソノカミ盲龍クモト勇夫ヘリト疲 膳所今省武備寄ルキチ

城有利兵堅甲在 况将湖水作湯池チ スナヅ

はた栗津世のよみ海の宿所のをまはるまはる月守泊しとる

一 勢田 兵夫 揚 勢田と兵夫揚 中月の況いゝまよふねとる  
勢田に兵夫揚たてぬまをほつりまるとて

のむ夫揚に早に粥飯食そまみ日利ありととる

後よりにも皆いなるなりと海にすすすと

史本 此の海を矢宵の舟れぬまをまびすと公朝

その勢田兵夫走れ波もこやくと心そかまわし宗長 瀬田の長橋

うち瀬田瀬田の長橋何をもく一村を富家 移ぬの松原

ちの海や霞くさるき根に波もまをまをせと世たのむはし

一支那ニシ 蓮蓮のき所へは浦とまの源津う浦たけが清と云

背東照天権現湖水邊の岸の浦はしを  
是るやと傳いりまをすはきたるかが渡とよみ有と

しよる時に清操原と云ふは志岸ありしよしと云ふ事  
志那と云ふ浦と云ふ又志那の浦といふ事あり

紫式部

志那の浦志那の浦と云ふは志那の浦と云ふ事あり

奥津嶋神社 備生郡ニ有 神名腰ニ出

志那と云ふ事あり一里半の陸路本及の志那の浦の

乃に志那の浦と云ふ事あり今に志那の浦に志那の浦

子に志那の浦と云ふ事あり 果俗の流あり

一本漢 <sup>コノハニ</sup> 又木の葉の神と云ふ事あり

栲まらに木の葉は流る事ありと云ふ事あり又栲まら

云

志那の浦志那の浦と云ふは志那の浦と云ふ事あり  
志那の浦志那の浦と云ふは志那の浦と云ふ事あり  
志那の浦志那の浦と云ふは志那の浦と云ふ事あり  
志那の浦志那の浦と云ふは志那の浦と云ふ事あり

志那の浦志那の浦と云ふは志那の浦と云ふ事あり

一本漢 <sup>コノハニ</sup> 又木の葉の神と云ふ事あり

志那

志那の浦志那の浦と云ふは志那の浦と云ふ事あり

志那の浦志那の浦と云ふは志那の浦と云ふ事あり

ふききの島のこしき山を北に今頼る程の山終の程  
水と森の山を北にこしき山を北に今頼る程の山終の程

一鏡と八幡との間に山あり入りより早と云ふ大橋村に在り云

一奥の海 伊勢那山 延命寺と云たり 本寺の祖を  
右子清也

首の寺は白くは南の奥中奥の山に在り云

浮田の山に在り云 志保の山に在り云 文に依るに教を

揚るるあり 上の寺は十間なる寺の寺に在り云

志保の山に在り云 志保の山に在り云 志保の山に在り云

上に天王山あり山の中に松を述べたに阿弥陀寺と云る有

西浦の寺を長命寺 北浦の寺は伊勢の寺

奥の寺は阿彌陀寺と云る有 志保の山に在り云

安土山風系 惣見記

元江あまの河山系とて、林に磨きたる甚<sup>荒</sup>を並べ、  
根を流の空も成道に流する事と云、西より山一遊り  
澄々として、水は流る、山中より、竹や草、清きあり、  
生命寺の観音あり、向ふ高き山、比良嶽比叡山大山馬也  
空の月も雲も、南の空、里々田畑を眺るとして、  
山のゆ糸世にまきなり、東より、観音あり、林に比良嶽  
として、益夜人跡絶つてあり、安土山、南に眺ると入江有  
山下は百歩おのふ家行<sup>軒</sup>地連ね、河子の流系、流結の風流



右京師議令とて遂にそるは之詔候大夫並留外  
極より多くの名物珍物の數<sup>舉</sup>券く納く、土地等然もまた  
天正十年六月十日未ゆ、明智左馬助、安土の地獄を以  
て、つし、灰燼と成り候也。

安土惣見寺とてあり、地曰信長郷、天正四年築城、安土  
山前、是中別所、高き、つし、信長公の御所、是二重  
高、十二間、石垣の上、北二十間、東西十七間、石垣の内  
藏、三月とて、つし、日本殿とて、つし、云、信長公、  
吳語春秋曰、鉉築城、以衛君、造郭、以守民、此城、郭之始也。

五經異義云、天子之城高九仞、公侯七仞、伯五仞、子男三仞。

春秋說文曰、天子固城、諸侯斬城也、斬城、者、缺南面、以受

天正四年七月初日、始、安土御室、長之、儀、仰、身、う、り、  
遇也。

出惣見記文

而城細工人之次第

上、一重、金、具、清和寺、四郎、彫、く、京、田、舎、の、上、平、之、

二重、目、ヨリ、京都、對、阿、弥、金、具、也、

清、和、寺、棟、梁、是、部、又、也、

水、廻、大、工、西、宮、遊、也、

港作

首刑部

有鏡

唐人觀被仰身高良既為鏡

御奉作御書法

木村法為也

以上

土臺土藏高十七間余此上七重天守被造藏前  
代未開經宮也先一重右藏之上土藏被用  
二重此上高南北二十間東西十七間高十六間半有  
之柱數二百四十六立柱長七間大一尺五寸或  
一尺之寸四方木也御座敷内材木皆以黑漆也

御座敷之次第

西十二間

金長才墨給揚元

粘柳水浪筆

同開月少書院有之是六寸是寸境鐘之系<sup>畫</sup>其利

從六合石山被居道 次二五五五五沙棚給給又十二

多<sup>畫</sup>其利 同給給依給給同<sup>畫</sup>其利八五五五五<sup>畫</sup>

南十二間 漢唐儒賢<sup>畫</sup> 次八五五五五有

東十二間 次二五五五五其八五五五 是沙膳所也

次八五五五五 在因以 六五五五五沙網戶又五五五五五

繪之八五五五五也 小方沙土<sup>畫</sup>其利沙<sup>畫</sup>

御影五ヶ所 沖網所也 西王母を以て十二支を以て十二支を以て  
因十二支を以て 部合七所伊網所を以て 山下に金燈籠  
被居置

○之東目十二支を以て有 因花を以て 給沖南公を以て 賢令  
間片是に 觀雲を以て 神の山を以て 仙像を以て 東麻  
弓公を以て 十二支を以て 同上以て 公を以て 仙人呂洞賓  
傳説也 給北二十五支を以て 西王母の給有 西王母を以て 八  
給ハ母を以て 湯塚に 廣標也 給中宮を以て 湯塚を以て  
湯網戸也 には 公を以て 湯塚を以て 給教合る 湯塚を以て

○西王母 西王母 給ハ母を以て 湯塚に 廣標也 給中宮を以て 湯塚を以て  
湯網戸也 には 公を以て 湯塚を以て 給教合る 湯塚を以て  
給有竹の洞と には 十二支を以て 松を以て 松の洞と には  
東公を以て 松に 鳳凰の給 次は 公を以て 許由耳を以て 給に  
給ハ公を以て 牛を以て 帰る 兩臂を以て 出さる 故 湯の  
御影を以て 一ヶ所を以て 湯塚を以て 七支を以て 給ハ母を以て 金燈  
斗り 給を以て 湯塚に 十二支を以て 給ハ母を以て 湯塚を以て 給  
の事と 給を以て 湯塚に 十二支を以て 給ハ母を以て 湯塚を以て 給  
れり

○西王母 西王母 給ハ母を以て 湯塚に 廣標也 給中宮を以て 湯塚を以て

小屋の壁くらしは細なる

○ 六重目八重目四重目あり内外より板を内柱  
と直り洩るる柱には新なる成道説法杖杖十寸  
を柱ありは伊極側鐵花法杖と云く端柱に  
花杖と云く高欄の末宝珠形物也

○ 上の七重目三層目の内柱は深き柱あり諸  
井には天人形向け御物と云く

湯の間の内柱は十寸高欄あり四角  
柱の七重目ありは板を板間を鐵杖杖十寸

内外の柱ありは流石漆布布をさそそ其の板は

馬鹿にありは流石漆善善をさそそ其の板は

一 千々の事など今も板の板あり

首根換板サシありは板の板ありありありあり

板ありありありありありありありありあり

ありありありありありありありありあり

後千載  
ありありありありありありありありあり

ありありありありありありありありあり

一 津守の板ありありありありありありあり

俊頼の云 血は國津はみの神といふ神なりと云ひて神  
の清けらかいそそ 女の田舎しきる 教に居ひく 禮を  
化りて 其おりの 日をまらうり 田舎ありと云ひて 人取  
こころしめいぬがくしうりし 志はまはぬのま  
くくそ ぬみかたりしあし ぬれぬ 教のあぐく  
くしてのまらしめうりし ぬれぬ 教のあぐく 出雅和集  
清くそ ぬみかたりしあし ぬれぬ 教のあぐく

長坂 有十境

龍潭晚鐘 北野寺梅八惜秋壯 鳥籠山鶴 鶴  
礪山そまき 江上お葉 普門山標 杉原時あ

西湖秋月

一 飯浦 俗よはらまの浦と云ふ 古坂むらさき寺より

飯浦むらさき寺より 毎年の月にはうらやまを  
つゝとてしむる 今も 貴くし物とて 意も 正しく  
く 高き 信しりし 方入 西を 友と 比例と せし けり といひ  
後 信し 飽る 乞食 寺中 高き 信し 信し 寺 信し  
鼓 矣 書 時 け 信 信 於 室 月 止 信 書 干 今 信 信 信

秘食右後信之 喰飯迷入湖寄此岸 指去浦名

曰飯浦

一 余吾海

織女の支出雑和集

首道は國守其の清よ 織女のかりくあああひんさ  
そころうくる田りあひんさあめけけら天の衣を衣う  
けねそ織女天の端うのわくそ ちろくそ田の事あひ  
あひんさう子さうさうさうさうさうさうさうさうさう  
のわくそあひんさあひんさあひんさあひんさあひんさ  
あひんさあひんさあひんさあひんさあひんさあひんさ  
あひんさあひんさあひんさあひんさあひんさあひんさ

天のあをあひんさあひんさあひんさあひんさあひんさ  
あひんさあひんさあひんさあひんさあひんさあひんさ  
あひんさあひんさあひんさあひんさあひんさあひんさ  
あひんさあひんさあひんさあひんさあひんさあひんさ  
あひんさあひんさあひんさあひんさあひんさあひんさ  
あひんさあひんさあひんさあひんさあひんさあひんさ  
あひんさあひんさあひんさあひんさあひんさあひんさ  
あひんさあひんさあひんさあひんさあひんさあひんさ  
あひんさあひんさあひんさあひんさあひんさあひんさ  
あひんさあひんさあひんさあひんさあひんさあひんさ

曾丹の百草首

あひんさあひんさあひんさあひんさあひんさあひんさ  
あひんさあひんさあひんさあひんさあひんさあひんさ  
あひんさあひんさあひんさあひんさあひんさあひんさ  
あひんさあひんさあひんさあひんさあひんさあひんさ  
あひんさあひんさあひんさあひんさあひんさあひんさ  
あひんさあひんさあひんさあひんさあひんさあひんさ  
あひんさあひんさあひんさあひんさあひんさあひんさ  
あひんさあひんさあひんさあひんさあひんさあひんさ  
あひんさあひんさあひんさあひんさあひんさあひんさ  
あひんさあひんさあひんさあひんさあひんさあひんさ

ははりの何れか嶺を山嶺と云ふはさきさきと云ふ所の山嶺に  
似たり昔は山嶺と云ふはさきさきと云ふ所の山嶺に似たり  
夫人と云ふはさきさきと云ふ所の山嶺に似たり  
まゝと云ふは北嶺の山嶺と云ふはさきさきと云ふ所の山嶺に似たり  
又神の社名を山嶺と云ふはさきさきと云ふ所の山嶺に似たり  
さきさきと云ふはさきさきと云ふ所の山嶺に似たり

今所 東西に山嶺南北に山嶺北嶺の嶺ありさきさき  
さきさき水嶺あり今山嶺ありさきさき川ありさきさき  
尾と云ふはさきさきと云ふ所の山嶺に似たり

山嶺と云ふはさきさきと云ふ所の山嶺に似たり  
八町四方あり山嶺と云ふはさきさきと云ふ所の山嶺に似たり

一 山嶺 山嶺に山嶺ありさきさきと云ふ所の山嶺に似たり

山嶺と云ふはさきさきと云ふ所の山嶺に似たり  
山嶺と云ふはさきさきと云ふ所の山嶺に似たり

一 山嶺 大浦 月山嶺 山嶺と云ふはさきさきと云ふ所の山嶺に似たり

山嶺と云ふはさきさきと云ふ所の山嶺に似たり  
山嶺と云ふはさきさきと云ふ所の山嶺に似たり

一 山嶺の山嶺と云ふはさきさきと云ふ所の山嶺に似たり

新拾遺

一西近はにほろむ田とふ所の名あり湖水にきは  
に物とてうほしむるに湖水のわたりきりきり  
し物なりあつさきくほよしひとほれとよふ  
是を湖の百木に西東なりうらなと百木の巻と  
しむるなり物とてうまき

たつしほをあらぬほれとてうまき百木の巻は物にうら  
河邊 湖水のうらまき

は湖をよまほれとてうまき百木の巻と誰うたのまじ  
河邊 湖水

さ湖をあらぬほれとてうまき百木の巻は物にうら

さ湖邊

は湖をよまほれとてうまき百木の巻と誰うたのまじ

水尾 湖

あつさきくほよしひとほれとよふ

陰節 湖

あつさきくほよしひとほれとよふ

さ湖

さ湖をよまほれとてうまき百木の巻と誰うたのまじ



比良

傷さくは長れ山内ゆめいし花の散るうら津のはま松

新物 大糸たひつこのまねよきまれをきき程をねいしう

あまのやぶつく漢道にゆきをきしらのうら津のまれ

まじれ ちかみれ ちかみれ

小松

はらや小松はちかみれをきき程をねいしう

堅田は田文田

一 堅田は田文田のちかみれをきき程をねいしう

堅田は田文田のちかみれをきき程をねいしう

堅田は田文田のちかみれをきき程をねいしう

堅田は田文田のちかみれをきき程をねいしう

堅田は田文田のちかみれをきき程をねいしう

堅田は田文田のちかみれをきき程をねいしう

堅田は田文田のちかみれをきき程をねいしう

堅田は田文田のちかみれをきき程をねいしう

堅田は田文田のちかみれをきき程をねいしう

一 堅田は田文田

千作佛者

あまの関十基上

一 觀音寺あり 大伴忠主の寺なり

満月堂あり 善師の寺なり 傳教大師作

海門山祥瑞寺あり 浮雲寺の別名なり

天文去丁酉九月廿七日 浮雲寺の別名なり 浮雲寺の別名なり

と云ふは 是は浮雲寺の別名なり

浮雲寺の別名なり 是は浮雲寺の別名なり

是のゆゑに浮雲寺の別名なり

浮雲寺の別名なり 是は浮雲寺の別名なり

是は浮雲寺の別名なり 是は浮雲寺の別名なり

一 豊田浦より雨 雲釣捲風絲 煙糸人祐好

漁家當日不知 出まは路紀行

一 去那 海舟入江 今ハ田代と云ふ

今ハ田代と云ふ 今ハ田代と云ふ

今ハ田代と云ふ 今ハ田代と云ふ

一 和途 世に七ヶ村あり 高浪中流に城 今省中村

今省中村 今省中村

今省中村 今省中村

今省中村 今省中村

今省中村 今省中村

今省中村 今省中村

いづれにありに法を治るは後のかゝる山登の神事

今里の人の世と神事と云ふは江原武鑑に於て

美濃の里の人の世と神事と云ふは江原武鑑に於て

此等ハ殿山の勢を惟る親王の御説とありと云ふ

河内 此等の浦は昔より神事と云ふは江原武鑑に於て

一 志賀

いづれにありに法を治るは後のかゝる山登の神事

大和物語云 志賀の里に山登に馬の神

事ありと云ふは江原武鑑に於て

志賀の里に山登の神事

無名抄云 志賀の里に山登に馬の神

事ありと云ふは江原武鑑に於て

今に大津連との世ありと云ふは江原武鑑に於て

昔の世ありと云ふは江原武鑑に於て

志賀の里に山登の神事

志賀の里に山登の神事

志賀の里に山登の神事

志賀の里に山登の神事

一 幸崎 唐崎 又一ツ松

幸崎大崎神女別處也 山王夫室御くわらま把り云  
松つ下に少社有り 花春あつたり云々 別處あり云々  
序と云 此神ハ後神也之月曾日江都郡の之山信  
多ク 源氏物語ハ龍波ハ信者 近江ハ幸崎後神の  
神あり云々 唐崎大崎神と云 題あり 堀田氏行集  
の和歌あり云々 掛札あり云々  
和云此堀田氏ハ近代之堀田鎮利の妻死た有時々此の  
集を撰書しと云 時代より不可なり 世に書を以てその  
可考

交に云堀田鎮利ハ遠之あり云々 之時代より其の心を班々  
考り 堀田氏云々 堀田氏にあり云々 是れ世に人  
可考  
お朝古交因縁に云唐崎の一ツ松一掛と云云の云はり云々  
云の葉を二毛と云云 州一り 葉の名を得云々 云々  
昔此を枯らつに西三原迄を院が成縁を掛結ひ云  
あやといひ云々 云々 出雪玉集云々 云々  
此れ云々 云々 云々 云々 云々 云々 云々 云々  
江渡武隈曰 永禄十年四月廿一日唐崎の松一夜に枝葉枯  
落

慶長六年二月廿九日山門無勤寺より申付松と取植く

親義作の義郷

いふは御座りたる唐新のひらき字色いふは御座りたる

御御

蒲生氏郷は唐新の御座りたる松と取植く

おのりや表の松は御座りたる松と取植く

小畑を別武府に御座りたる松と取植く

ふりつりきり

左の松は御座りたる松と取植く

山王の御座りたる松と取植く

松部成伸

おのりや表の松は御座りたる松と取植く

は御座りたる松と取植く

おのりや表の松は御座りたる

おのりや表の松は御座りたる松と取植く

おのりや表の松は御座りたる

おのりや表の松は御座りたる松と取植く

おのりや表の松は御座りたる松と取植く

おのりや表の松は御座りたる松と取植く

伊勢左補御座りたる松と取植く

るにたのむるをきしむる事しるはははるる

ころあまのつらみの海おろくつらみ吹ふるははるる

新和

唐詩志書れあまのつらみ吹ふるははるる

話にまあまのつらみ吹ふるははるる

。志賀の津

又海らまの志賀の津のあまのつらみ吹ふるははるる

。志賀大田

志賀の津のあまのつらみ吹ふるははるる

大津渡

匡一房

長江の津津のあまのつらみ吹ふるははるる

志賀の津

貴之

あまのつらみの津のあまのつらみ吹ふるははるる

津のあまのつらみの津のあまのつらみ吹ふるははるる

詞書にまあまのつらみ吹ふるははるる

志賀の津北白川の津のあまのつらみ吹ふるははるる

あまのつらみの津のあまのつらみ吹ふるははるる

淡海録子之中巻終

澄海深子之卷下

東海道紀行

一 追分 池川針

藏作人々惜寸陰 切磋琢磨似成金

池川水裡淨鋒刃 孰曰同摸海底針

走井

翠涌井華鐘秀精 走流勢浩有餘清

尋常難比貪泉水 乙軟自知爽客情

於十七  
けり甲井此處極の勢がきまなり長きにち抱る甲井の約  
走甲井の程をきくはやお坂のきだりにゆる方事の約

逢坂關

周令

関路白駒過障頻 来風塵幾徃凡塵  
相逢相別東西面 會不會麼南北人

逢坂關のありのこも地まきひくそわさる世を控ふ  
あ坂の岩の風をさけよといふ事よふ法はまひつそお坂

ふふ程程と歩くあ坂の関はあさよきる  
逢坂朝臣  
たき  
きむねはあさくあ坂の関はあさよきるをゆきふ

おぼれ閑路はうらみのつらきはあつらふらふのゆくをとくわよ  
定めぬよあはれはあつらふらふのゆくをとくわよ  
新拾 せまきふりあはれはあつらふらふのゆくをとくわよ  
於題歌 せまきふりあはれはあつらふらふのゆくをとくわよ  
はたけ せまきふりあはれはあつらふらふのゆくをとくわよ  
おまじふりあはれはあつらふらふのゆくをとくわよ  
夜半つらあはれはあつらふらふのゆくをとくわよ  
名寄 せまきふりあはれはあつらふらふのゆくをとくわよ  
源定信 せまきふりあはれはあつらふらふのゆくをとくわよ

忠孝

古今 義世にふはれぬ石はあつらふらふのゆくをとくわよ  
引物にうらみあつらふらふのゆくをとくわよ  
朝隆 せまきふりあはれはあつらふらふのゆくをとくわよ  
宮内卿 せまきふりあはれはあつらふらふのゆくをとくわよ  
家治 せまきふりあはれはあつらふらふのゆくをとくわよ  
あはれはあつらふらふのゆくをとくわよ  
右邊坂のうらみあつらふらふのゆくをとくわよ

閑寺

一 大津 湘水 膳所 詩う出下前  
閑門有寺僅遺名 多到這道嘆別情  
各自東西堪錢飲 鷄鳴唱曉又鐘声



勢田

勢田古戰場より美濃の役に白雲の放浪して外蒙  
蓋有りと云ふ事考証の抄を以て内相を  
くんとするに揚きして二巻ありて一巻は  
ふりての事にあたり目録記を以ては天智天皇  
御ありんとする時大才の沙門と云ふ事始り  
去る事に入るとは天智天皇の御ありて  
おきありて天智天皇の御ありて  
大中元年より潜ふ事あり初めは天智天皇の御ありて

濃州不破の美濃の尾品の事を以ては白雲子  
志と我い諸々近江の勢田と云ふ事ありて  
子と云ふ事ありて天智天皇の御ありて  
大才の志と我い諸々近江の勢田と云ふ事ありて  
と伯林維矩の跡と云ふ事ありて大才の清見原の  
天皇と云ふ事ありて天智天皇の御ありて  
懐風藻の潜宝年中に海集と云ふ事ありて  
皇太子天智天皇の長子と云ふ事ありて天智天皇の御ありて  
と云ふ事ありて天智天皇の御ありて

きめふ文を腕より南せまふ筆をいりたり能む  
徳ゆ康ハ祝王の時をきりて去るかきさきはその  
こと城す美をかきさきしや進るる大なる意王う  
建文城よりくく白恨子を載たるも皇城同日の  
物言ふるを

同長檣

詩作多畧之只舉一純

林道春

勝敗具亡憂更憂 千年人夏落某楸  
積骸為蒂血為水 都入執多檣下流

私曰夏勝所粟津異説あり前に出端不同勝所此の粟津

也山王祭祀時供菜盛故曰勝所是近世之行吉文符

合者乞

矢橋舟中作

林春齊

曙雲接浪琵琶湖天

殘夢風吹渡口船

水陸欲算近直路

執多勾股矢橋弦

ゆりの板を苦みくちりくちりきりきりきりきりきりきりきりきりきりきり  
お板の字をすしすしすしすしすしすしすしすしすしすしすしすしすしすしすしすし  
田のよみ流田の川流もあつてきりきりきりきりきりきりきりきりきりきり

一 地路 矢念 草律 逸詩難見仍而不記

野路

長味足微吟 行々曙色分 難鳴野路月  
殘影下松林

いふ可き事も言はずに神女風 月影をよほりて野路の志あり

婆饒

過現未來不可得 衲僧行脚照心難  
翻言然日喫冰喫 新婦考婆莫受瞞

石部晚步

行々岳石辺 一路停平川 相語摘苦州 不傷西日遷

水口

甲寅郡中途不窮 郵程日々向西風  
今因地号何沈陸 水口行舟朱晦翁

横田川

一面横川兩岸閑 長途来濯馬蹄埃  
東流日夜帰何処 自感浮生在水哉  
去歲八月日 大相國二系の沙所を歩みありて翌日

此のたをよき後其日くく并流きありあはれ之日  
遠るよりくもるに一夜更るるく御前に弔と侍  
し時子而の事とよくと作もは既記の事  
侍りしに能讀其の能致其の事とくし  
流ありし流とく事とく流とく事とく  
少くいかん考きあらうと親にハカとく  
あはれとく事とく事とく事とく事とく  
く事とく事とく事とく事とく事とく

とく事とく事とく

愛生従子親 義立自君臣  
侍讀古年雨 淚痕今日人

一 古く事とく事とく事とく事とく事とく  
さうりしに有秋語を侍にる事とく事とく事とく  
るの事とく事とく事とく事とく事とく

一 行李東西久旅居 風光日夜憶郷園  
梅花繫馬土山上 知是崔嵬智智岨  
蟹坂 猪鼻山中是三平山

路傍有蟹塚據史語曰昔北山有蟹為崇宮人  
人甚夥矣偶有異僧而過要蟹化為表少年  
而欲誑此僧々怙然不顧時謂僧曰我見是郭素  
之精也見吾子骨相匪直也人直之得道者也  
以妖術難誣至願轉宿業得佛果矣僧領曰然現  
汝之全体視吾至乃去入穴有暫山鳴谷應腥風四  
起踟躕一蟹出其大不識幾丈也二整四足瞳若向僧  
僧乃諭云汝形怪異唯恐致驚動過客去登臺其形  
為細狀來以授汝戒至再化為一寸小蟹時僧唱偈

數篇以所持之錫柄伴擊殺之磕然而失自是不  
為妖也後世築墓其所建以石塔又指前峯岑  
蔚之処曰是田村子鬼相戰之地也二說未知然否  
以上西歸錄

山中吟

山路及何日 登攀吾輩勞  
葦花風外亂 嶺樹霧中高  
猛將誅魑魅 異僧碎蠚螯  
關門今不鎖 他却拋函嶠

一三上山 一名百足山

經過之上山阿 百足馬眩曾作麻鬼  
不被變情无笑驚 靴多橋下欲食肥  
同其形似士安年而小也 同

水口西邊石部間 眼青富士小屋顏

槃踰勃窣雖擔士 一箕以成百足山

同

立閑

馬背回頭之上密 士安年描出縮雄觀

天凡吹落白雲彩 錯見瑤花二月寒

同

梁南和尚

未及凡流江九邊 行人看系似志還

斯山高出士安上 白雲漫々欲曉天

鏡山

周令

裝点新粧京洛邊 對湖歡笑對山妍

旅愁未解掩明鏡 昨日白頭今少年

老蘇杜

法隆寺 ありけのけりひをいそぐと親せひるりの夜はのさる

世やともいふおとろく病よひとひはぐれをそよめけし本のか

本丸

字のむらさき此のむらさき  
意法  
月2日

同

少年不厭老蘇林  
遙見柴扉過竹林  
恰訝桃源塵外境  
田翁歸路白雲深

高宮

邊路紀行

長堤竹綠拂晴崎  
漸到高宮駐客蹊  
棧枿隔林春昼永  
始知村婦織緯衣

米原所見

同

稼穡艱難民遂生  
馭郵開喜米原名  
一犁雨霽好風系  
如夕湖田半就耕

姉川

同

西虎爭雄憶注時  
姉川滔々逝如斯  
漁翁不識廢魚笱  
独倚柳殘理釣絲

雪中自柳瀨到椿井  
同

遊子翩翩涉彼岵  
數尋積雪壓丘墟  
路從柳瀨到椿井  
人着竹鞋絆筍輿  
晴後雷霆浪壁倒  
凡前橐籥鋤花老

靈陽已没巖牆下 勃窣吾行似鴨楮

坂田

あつちや坂田の務とて多はるる乃あはれは代の初にをほく

不知哉川 今は大坂川と云又ハ名取川と云ふ

ちやあまきくに拂ふ床のしらさのやうに中をたぬいたるむ

あつちやあまきくに拂ふ床のしらさのやうに中をたぬいたるむ

長江

長江のさきさきとてはあまきくにの當番にさきさきとては

鳥籠

おしの床のさきさきとてはあまきくにの當番にさきさきとては

おけえぬ床のさきさきとてはあまきくにの當番にさきさきとては

あつちやあまきくにのさきさきとてはあまきくにの當番にさきさきとては

目毒

あつちやあまきくにのさきさきとてはあまきくにの當番にさきさきとては

あつちやあまきくにのさきさきとてはあまきくにの當番にさきさきとては

あつちやあまきくにのさきさきとてはあまきくにの當番にさきさきとては

朝日山

あつちやあまきくにのさきさきとてはあまきくにの當番にさきさきとては



あはれは須賀の日の影をよとけつる世のわづらひを  
あはれは朝日の影にをらるる世のわづらひを  
あはれは朝日の影にをらるる世のわづらひを  
あはれは朝日の影にをらるる世のわづらひを  
あはれは朝日の影にをらるる世のわづらひを

伊香 山海浦

塩津。菅浦

沖津原の香をよとけつる世のわづらひを

為所

海なる山

兼盛

於遺

近はるる世のわづらひをよとけつる世のわづらひを

石戸山

後十載集

久々の天をよとけつる世のわづらひを

伊香奥

前右大臣頼朝

あはれは朝日の影にをらるる世のわづらひを

新石戸

新十載

あはれは朝日の影にをらるる世のわづらひを

玉置原

新十載

あはれは朝日の影にをらるる世のわづらひを

玉造

於邊 前生地の玉の結ぶに経路の糸をよひてうはげの敷く

玉井

清らなる水とありてちきまに玉井の水のたのしみ

むら

子裁 心裁とてん地裁の玉に糸通しをみるはふ月をかり

谷と

かりのいとほし飛んたるがそふにはきくともむきゆが

こむせ村

匡房

幽玄の奥のねもよるぬらむの村乃行玉あり

植の村

淺草邊 ところあるはねわつて植のわ天のありて糸よるよ

益糸村

日 糸はかみせもる糸のこもてねみる糸は糸の里

今海野

古今 糸はうり胡とよまはう海野のくに田舎をみるあまね

海野

あまねや海野の糸は海野の糸よる糸よる糸よる

大國野 乙 智部 兼盛

年とていふことをえつり大木の里をたのむ

大木ふじ日

ふじのまき大木ふじをまききたれとてはせむら世を

富部郡の里 甲賀郡

乙にまきとてはせむら世をたのむ

朽木の松

まきとてはせむら世をたのむ 朽木の松にふれ

栗本の里

金ふ 朽木の松にふれ

千の巻原

千の巻原の松にふれ

小坂の浦

千載 小坂の浦の松にふれ

栗田原

栗田原の松にふれ

音の浦

音の浦の松にふれ

若菜の杜

千載  
若菜の杜のあまのうらみはあまのうらみなる若菜の

鍋山 カレイイ

若菜の杜のあまのうらみはあまのうらみなる若菜の

蒲生好し

若菜の杜のあまのうらみはあまのうらみなる若菜の

陸聖

若菜の杜のあまのうらみはあまのうらみなる若菜の

青柳村

新撰古今

若菜の杜のあまのうらみはあまのうらみなる若菜の

若菜の杜

人好

若菜の杜のあまのうらみはあまのうらみなる若菜の

若菜の杜

若菜の杜のあまのうらみはあまのうらみなる若菜の

若菜の杜

若菜

若菜の杜のあまのうらみはあまのうらみなる若菜の

三村山

三村山

若菜の杜のあまのうらみはあまのうらみなる若菜の

白月山

新和  
ゆふらふ白月山あふゆの川流はほとけをあらわす

長村山

法持寺  
あふらふ長村山の柳葉を平氏のあまりにまじ

速瀬山

玉兼  
あふらふ速瀬山あふゆの川流はほとけをあらわす

望田

ふら  
あふらふ望田あふゆの川流はほとけをあらわす

朽木山

雅強  
あふら

あふらふ世のまにあらむ朽木の山はほとけの埋ま

送賀

あふらふ世のまにあらむ朽木の山はほとけの埋ま

あふらふ世のまにあらむ朽木の山はほとけの埋ま

あふらふ世のまにあらむ朽木の山はほとけの埋ま

望田

法持寺

あふらふ世のまにあらむ朽木の山はほとけの埋ま

三井

あふらふ世のまにあらむ朽木の山はほとけの埋ま

宇治郡

河津村

あやうり朝とまはしつゆの我に田舎をなすゆめ

坂念山

今上天掌令徳紀方湯屋原内十並江國  
の坂念の山田に稲を多くとわはれし中世を  
人えさるるに中きるふよとあ

坂念山田に長ある稲ととあ納しとせの程を  
とくられ

八十湊 磯崎 方村云

今東をたに百葉手七の方江湊に坂念山に

兼佐の夫頼長は用名所令ゆ也磯崎又此に

有坂也 但又地所多証く地と書るを

つよの湯津をたつりつとふらとる松とあまむ

内十程とあまの湯津とあまの磯崎とあまの湯津と

一 梓松 宗祇國分 兼頼名所村 湯屋村に載る

進江坂所といふ湯津抄小美徳國とく津のあり

ほほらとあまの湯津の由とるこまあまらつたの

山とあまの湯津とあま

能因法師

ニヨリ様の松をかまらまき 雑木の海をとりやまふりや

竹生湯と云ふに住居くまふり山の名は遠くあり

中こそあつて日吉の江の神のあつていふ

とて傳へゆきたりいほくもゆるり

法下

もろもろの沖のつちの梅ねあともよめくさうなれ

宗紙和歌讀徳抄曰 原の名所 物とのあふ

つらき世 宇津世の橋ハ 替きの橋の川にたふり

漢ハうち出の漢の海と云の海。浦の浦。海と云唐詩

山吹の弁。はははははは。関ハあつた雲。歌を

る。ささのむきや。あつた。ゆるきの雲。山ハあつた

何ぞよる山 鏡山 ちの山 ちの山 ねん山

いふ山あつた。右者ちのりといふを思ひ

仲葉

あつたの雲はははははははのあつた

あつたの雲はははははははのあつた

あつたの雲はははははははのあつた

あつたの雲はははははははのあつた

後集

水のもよ毫の匂も此の川あきくは代を信ん山吹のさき  
三尾ヶ浜 志長の浦のそよぎ松川に流るる浪もつら  
澄海所 詩歌新字目録名所相郡に  
附録 一六略一三三三可記

一 志賀郡名所 大巻 二の巻 客人の巻

七の社 日吉 十津川の巻 石寺の巻

新巻の巻 杉洞 都室 我志松 波母山

桂川 三津川 寺崎 大比敵 小比敵

志賀町 長巻山 三井 山井 走井

美の川 月見坂 打出渡 志賀大橋田

あさ波 大津文 志賀津 新巻 寺尾

白鳥山 お坂山 美津川 寺崎 大津川

常盤橋 比良 小巻 杉木山 小野

志賀合 堅田 花巻 寺崎 志賀蔵

千島湖 栗津巻 陰膳渡 杉田橋 美寺

大嶽 神念山 須川 お坂屋 石山



一 高嶋郡 三尾 高嶋 陸奥 河内

百草ユルキ 香取 桑原 志長浦 足利海アソカ

河内 津里 舟木 淡 夜中ヨシノ の浮

一 淡井郡

月出 新石 竹生 鴻 塩津 大浦

朝見山 菅原 浦 小岩

一 伊高郡 余五浦 已コタカ 志 野ノ 嶽ツ 嶽ツ 志シ 海山ウミノ 云

伊高山

一 坂田郡 野 朝妻 伊吹山 馬場 碓氷

長谷 津高

一 大上郡 千々杉 多賀 高安 不知川

太上川 鳥籠山 千坂浦 竹生 鴻 碓氷

千々浦 山 志 淡 長谷 根 志 松原 志

の海云 又 平河 志 志

一 中野郡 大國里

一 神崎郡 岩田系 長村山

一 蒲生郡 手取橋 蒲生野 玉山 野子坂

一 那須郡 三上三笠 守山 聖剛川 橋山 南

鏡山 嫩山 老後表 木沖溪

一 栗本郡 藤原 那須 久保 田上 志那

サハナカケ 水落 三保 白月山 橋谷

栗本里 八瀨 玉澤里 鶴子 童<sub>ワラバ</sub> 藤浦

海濱山

一 甲賀郡 信樂<sub>シノガタ</sub> 山 岩根 鳴那里

新門 之尾 神山

○ 雜書

屋敷浦 半渡 宇治原 若杉表 吉野山

大念山 板倉山 石戸山 龜山 連座山

玉川原 瓦礫山 玉川 炭崎 益原里

赤坂山 崎野山 榎村 松崎 梓山

三村山 本宿山 徳津 吉柳村 出海

鷹尾山<sub>早良</sub> 板倉山 田上 半山 多脚山 田上

中洲山田上 小山田上 石鼻まき 石鼻まき 百字山まき

横田山 沙石山ハシロ 依細原ヨシノ 能登原山

玉杉山 取巻池ウケマキ 下之原シノハラ 夷橋

白石山 高棚所 玉井 松崎里

吉田里 千枝里 石根山 玉村

水尾橋 高村 安身村 高野村

高野里 久見橋 津上橋 海川

高野山 高野山 高野山 高野山

近江國之終國奇物に出

右記方名所字致 予在 和号 名所 追考  
名所 洗濯 綴 因洗濯 綴 名所 分角 其初 出火

同名列

湖箱橋 日光山 大津 長門郡 伊豫

堤ニ 井出 渡 志賀 長等

云津渡 松津

三尾 渡りあり 手向山 大和あり 朝見 山城あり

まの山 まの山 陸奥あり 大和あり 杉津あり 山城あり 花園 山城あり 長瀬あり

鏡山 山城あり 岩根山 山城あり 伊吹山 下野あり 横山 山城あり

以良谷 丹波あり 崎部山 山城あり 寺尾橋 陸奥あり

中野山 丹波あり

私曰東近江國、鎌倉源氏の代より平太人の  
國危の十二人の郷侍と云く有る如し  
去後尊氏の軍の法時分佐を以て判官

入道と云う感勢よきおかしき一國去はの乃譽  
に従つたと云しと云く其のあまうは別と云  
ふあり江南江北と云も九州のあまう  
といひむと九州のあまうといひあまう  
江の南江北のあまうと云ふ西家より  
各居たりと云く南北をよ一と云く  
備前備後と云く相牛にあり  
東江のあまうと云ふ北のあまう  
京極と云く一と云く此國の侍あり

あまの原... 後... 武人の教... 知

江陽屋形之次第

一 應仁元年... 高頼公

一文亀三年... 氏綱公

一 永正十五年... 義實公

一 弘治三年... 義實公

管領職号之在... 知所由也

一 弘治三年... 義秀公

一 天正十年... 義郷公

義郷公... 武治曹司

義出... 記録

淳海録子之卷之中之下終

Blank page with significant water damage and discoloration.

Blank page with significant water damage and discoloration.

